慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宋元刊南北史・七史および隋書について(上)補訂
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.295- 300
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0295

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋元刊南北史・七史および隋書について（上）補訂

尾崎　康

前輯のこの稿は印刷に予想外の時間を要したために、執筆時・脱稿時に予定していなかったのであるが、校正中に台北で中央図書館本を調査する機会が得られた。南北史の元刊本の一部に、それでも十分であろうという認識で、実見せずに諸書誌の解題によったもの、実査しないままに書目によってごく略述したにすぎない部分があったのであるが、この折にこれらを精査できたので、前稿の末尾の余白を利用してその結果をごく重要な点だけ、附注として提示しておいた。しかし、原刻本、および明初ごろまでの修印本については、正確な解題をしておく必要があると思うから、ここに多少の重複をいとわず、補訂として記述することにする。実際に原本に当るという基本を怠ったために、このような変則的な方法をとることになったことを深く省み、恥じている。

南　史

南史については、前稿一九九頁の上下段にかけて表示した中央図書館善本書目著録本のうち、1・5～8の五本を調査した。以下、この番号と前稿の解題の所載頁・段を掲げたうえで、詳述する。

元大徳一〇年広徳路儒学刊本

（1　一九九頁下段）

八〇巻　元大徳一〇年広徳路儒学刊〔元末明初〕修　四〇冊

A〔明前期〕印　襯装　大半（七四巻弱）

B〔嘉靖七・八年〕印　金譲玉装

巻七一～七三・巻七八第七葉～巻八〇（六巻余）

の同版二種の取合本である。現在はともに同じ淡鶯色表紙に改装されていて、B本は第三六・三七前半・三九後四分の一・四〇冊にあたる。このB本は料紙が縦二～五チンほども小さく、それで金譲玉装とされるのであるが、その中に明正徳一三～一六年の公牘紙の紙背を用いたものがかなりある。

両本とも元末明初の補刻があり、とくにB本の巻七二第一・二葉に刻工張伯上の修葉があって、かれは隋書・唐書にはしばしば補刻刻工としてあらわれる者である。が、B本にもこの巻

次の中にはA本より遅い補刻はない。B本には補写葉が多く、版木にはたとえば上方の数段が横に大きく欠けて、しかも明代に補写された葉が五〜六もあり、字面は漫漶というのではないが、かなり破損が進んでいる。したがって両本の印行には明らかに時差があり、A本は明前期か中期にかけてかと思われるが、B本の公牘紙には正徳末年の一六年の文字も見え、次で嘉靖であるから、廃棄の年限をぎりぎりに見積っても、嘉靖八〜一〇年の南監二十一史のための補修のまさに直前、同七・八年の印の限定してよかろう。補写葉は巻七一・七二・七九に各三、七九に九、八〇に一〇葉もあるが、これらがそのあと直ちに補刻されることになる。

しかし、前稿でも触れたように、北京図書館善本書目に「元大徳十年刻明嘉靖元年重修本」一二冊が著録されており、これは当然、鉄琴銅劍楼蔵書目録および同蔵宋元本書目にも、所蔵の元刊南史八〇巻に、嘉靖元年修板がままあると記されている。これは当然、嘉靖元年の補刊年記が存在するのであろうから、このB本にもこの六巻余以外のところに、それはなければならないことになる。正徳一六年の紙背文書を使っているのに、その翌年の補刻がないはずがない。この六巻余の範囲では確認できないから、〔元末明初〕修としたが、嘉靖元年修は疑いのないところである。

その紙背文書は、よく見えないのであるが、正徳一三〜一六年の年記があり、浙江杭州府・同紹興府・同同余姚県・同衢州府・同同江山県・同金華府蒲江県などから、南京光禄・同龍戸衛倉・同潘陽右衛倉などへ食粮として送ったもののようであり、方六・五センチ、七センチ、八×四センチなどの大型の官印もいくつかある。宋刊七史の魏書、次の隋書にも、年代にはかなりの相違があるが、同種の公牘紙がしばしば用いられているところをみると、この種の文書はさして保存を必要とせず、その保存の期間も短かったのかもしれない。

蔵印は前稿にも記したが、清の果恭親王印は補写葉にも捺されている。

なお、前稿附注（1）に訂したが、巻八〇末葉下象鼻の「桐学儒生趙良粲謹書／自起手至閣筆凡十月」の二行は、いまやこの本だけに残るものであるから、誤りは些細なことであるが、正確を期したいと思う。

（5　二〇〇頁下段）

存二六巻（巻四〜七・一一〜一五・三八〜四〇・四四〜五四・六八〜七〇）　一〇冊

元大徳広徳路儒学刊〔明初〕修　（北平）

薄赤茶色原表紙（三〇・四×一五・七センチ）が「南史」の大型双郭〔明〕印題簽（外郭二一・五×三・四センチ）とともに、第三〜六冊に残る。他は新補唐草文焦茶色絹表紙、裏打補修。ともに粘葉装。巻四の首一五葉欠。

ほとんど原刻であるが、わずかに巻五第二六葉と巻七第一八葉は、同版であるが、明初の補刻にまちがいないとみる。

「広智退隠」「観書以進徳也竊／書虧徳幸勿為之」の墨印は、ほぼ毎冊首尾の匡郭外に捺されている。「京師図書／館収蔵之印」。

（5　二〇〇頁下段）

存一七巻（巻二・三・六・七・一六～二〇・二二・二三・四四～四六・六五～六七・六八首葉）　七冊

元大徳広徳路儒学刊〔明初〕印　（北平）

後補青紫色表紙（三三・三×二〇・七セン）、包背装。巻一九の首葉が欠け、一七巻の末尾に巻六八の首一葉が残っている。おそらくすべて原刻葉で、補刻は含まれていまい。しかし、明代に入って刷ったもので、完全な原刻本とはいいがたく、たとえば前掲本のように巻七二が存すれば、補刻の張伯上の葉がある可能性が濃いと思われる。刻工名は 僧玉山 玉山 僧 徐 章 宗 甫 岩 共。「京師図書／館収蔵之印」。

以上三本を通じて、1のB本を除いては、版木の状態もさほど悪くなく、南史は明前期までごくわずかに補修されただけで、時折、印行されていたもののように思われる。百衲本にはこれら当時の北平図書館本を一部に利用しているのであるが、なぜもっと積極的に用いなかったのか解せない。

明初覆元大徳一〇年広徳路儒学刊本

（7　二〇三頁上段）

存四四巻（巻一～一八・三七～四六・六五～八〇）　六冊

〔明初〕覆元大徳広徳路儒学刊本　（北平）

後補藍色表紙（二八・七×二〇・一チセン）、「南史本紀巻一之四」のような墨筆題簽、包背装。

南史目録に次いで本文に入るが、広徳路儒学刊本にほぼ忠実な覆刻である。首葉の匡郭は左右双辺（二二×一五・五チセン）。補刻はない。刻工名については、次掲本のところで扱う。

「京師図書／館収蔵之印」。

（8　二〇三頁上段）

存三二巻（巻三四～三七・四二～六六・七一～七三）　八冊

〔明初〕覆元大徳広徳路儒学刊本　（北平）

後補薄青緑色表紙（二九・五×一九・六チセン）、「南史列伝三十四之三十七」のような墨筆題簽、包背装。

前掲本と同版。ほぼ同印。したがって、補刻はない。

「晋府／書画／之印」「敬徳／堂図／書印」、「京師図書／館収蔵之印」。

刻工名は 前稿に二度にわたって表示したが（二〇三・二一四頁）、今回 新たに採録して前表に追加記入できなかった者を、ここに掲げる。二一四頁の表の方が利用に便利であるから、これの南史の項への補遺とする。

2十五　3子和　子得　子徳　5以善　正彦　11郭名遠
陳厓　12黄于　黄以実　黄洪　黄右　15劉子和　劉行

北　史

北史については、前稿二〇七頁所掲の元大徳信州路儒学刊本を三部、同二一三頁下段と二一七頁上段の明初の覆刻本を二部、閲覧した。前者のうちの二部に、中央図書館善本書目に誤記があるばかりか、現在の架蔵の状況に混乱があることなども

判明した。

元大德信州路儒学刊本

存六五巻（存巻一・二・五・六・九～一四・一七～二〇・二三～三二・四一～四九・五六～六四・六八～七一・七四～八三・八六～九〇・九五・九六・九九・一〇〇）〔元大德〕信州路儒学刊〔明初〕印　三二冊（北平）

茶色表紙（三六・五×二二・九センチ）、「北史」の大型双郭題簽（外郭二二・五×三・五センチ）、粘葉装、明初印の原装であろう。右方に墨筆の目録題簽が補われている。

ところが、現状では、後補紺色表紙で包背装、大きさも縦四センチ余、横二センチも小さい、装訂の異る本が一冊、紛れこんでおり、その巻次は巻二～四であるが、これは装訂からも、もとの北平図書館善本書目の存巻次からも、次掲の存二六巻一三冊本の一冊である。そして逆にこの一三冊のうちに、この大型原装の一冊が混っていて、巻八三である。大陸から移送の間に混乱したのではあろうが、一見して明らかであるし、とくに巻八三の一冊はやや小型の一二冊の中に無理に入れられているために、保管上にも問題がある。

中央図書館の善本書目　増訂本㈠　一二二頁には、現状によって著録せざるをえないであろうから、これを存六七巻三二冊、次を存二七巻一三冊とするが、やはり細部に混乱を生じている。巻二～四をこちらへ移したのであるから、紀二が重複し、三・四も存するのに、「欠紀二下至四……」と誤るもので、「二下」というのは、版心に「上」と離ってあって「下」がないための錯覚であろう。ここでは、この混乱が是正されることを期待して、標記のような本来の構成をもって扱った。

目録を欠くが、本文首題は「魏本紀第一（低五格）北史一」、左右双辺（二二×一五・六センチ）。版式一般については前稿の静嘉堂本のところに詳記したが、元末明初の補刻およびその刻工について訂正を要する。

まず、この本に元末明初の補刻葉は認められず、原刻とみなされる。二〇七頁上段の元末の補刻刻工五名は、百衲本について蔵印からこの本と判断して挙げたのであるが、百衲本は首尾の印と中味とは必ずしも同じではないようで、これらの巻にこれらの刻工の補刻葉はない。

次で、二一一頁上段の表の〔元末〕と〔明弘治正徳〕の補刻刻工であるが、かれらはすべて〔明初〕の補刻刻工で、同期の者である。これを誤って二期に分けたのは、百衲本はこの本の存巻は当然これを用いているものと早合点して、これと静嘉堂本を対照し、百衲本にもあらわれる者はやや早いはずであるから元末、みえない者は明でやや間隔があるべきであるから弘治正徳ごろと推定したのである。しかし、実査した結果は、原刻のこの本と、明初修でかれらを同等に含む次掲本とを、百衲本がいわばごちゃまぜに使ったのに惑わされたのである。

「京師図書／館収蔵之印」。

存二六巻（巻九・一〇・一七・一八・三五・三六・五二～五五・五八～六〇・七八～八二・八六～八八・九一～九三・九五・九六）〔元大德〕信州路儒学刊〔明初〕修　一三冊（北平）

後補暗藍色表紙（三二・三×二〇・八センチ）、包背装。

前掲本のところに述べたように、その巻八三の一冊とこの本の巻二～四の一冊とが、相互に入れ違っているが、ここでは訂しておいた。

明初の修がごく数葉ある。巻八一に二〇葉も欠葉がある。

一〇〇巻（巻五四重複）　左の四本の取合本　九三冊

元大徳信州路儒学刊本　同〔明初〕修本　同至嘉靖遞修本

〔明初〕覆元大徳信州路儒学刊本〔明〕修本

後補金砂子散し艶出水色表紙（二七・八×一八・四センチ）、襯装。巻五四は重複して二部あり、その一方だけは後補金砂子散し白桃色表紙（大きさ同じ）、「王印／献臣」の印があり、巻首に朱句点が打たれている。

標記したように四本が取合わされて一〇〇巻を成しているが、これは傅増湘が一九三〇年、すでに四二巻を欠いていた楊氏海源閣旧蔵本を入手し、同版の端本を集めてこれに補配し、一〇〇巻に復原しようと努めたためのようである。このことはこの本に附された傅氏の跋と叟鑑楼蔵書続記にあり、前稿にも触れておいた。しかし、氏は信州路刊本と覆刻本を混合している。

今回、この本の全葉を精査し、蔵印との関係も合わせて表を作ったが、いまこれを整理するとほぼ次のようなことである。

まず、楊氏の蔵印は目録・巻一の二冊にあるだけで、五八巻にはとてもほど遠いが、海源閣本は相当に破損したことも想像できるから、押捺の葉が落ちたものを首尾だけ補った巻も少からずあるのかも知れない。ただし、目録は全葉が覆刻本で、その原刻一七葉・補刻一四葉であり、巻一は大半が元信州路儒学刊の原刻本で、覆刻本の明修葉が三葉だけ混っている。この点からは、すでに海源閣当時から両本が混合していたか、あるいは両本がそれぞれに所蔵されていたが、ともに大きく欠けたために残巻を合わせたか、のいずれかと考えざるをえない。ただし、海源閣蔵書目（光緒一三年跋刊）およびその後に楊保彝が編んだ海源閣宋元秘本書目（民国二〇年　山東省立図書館刊）には、北史は一本も著録されてはいない。

次に、版の別からみる。元大徳信州路儒学刊本の原刻が全葉を占める巻が、計三八巻ある。巻三・四・六・九・二〇～二六・二八～三一・三四・三六・三七・三九・四八・五二・六〇・七四～七六・七八・八〇・八三～八八・九二・九三・九五・九六である。

やはりこの原刻葉が一巻の大半を占め、一～六葉程度のごくわずかに、補刻または覆刻葉を含む巻が、同じ三八巻ある。このうち二巻、巻八一・八九にはそれぞれ四・一葉の明初補刻が、六巻に明初補刻と覆刻の葉とがある。嘉靖修葉と覆刻葉については後述するが、欠葉に補配されたものとみられるから、これは大徳刊明初修本である。北史の明初修は非常に少いから、先の原刻としたものもあるいは同印かと考えられなくもない。

この七六巻のうち半分強には蔵印がなく、二〇巻余に「曾経我眼」印が、一〇巻余に一部は前者と重複して傅氏の諸印が押

されている。曾経我眼印は、季振宜や楊氏の諸印と併用された例はなく、いまのところ誰の蔵印かわからないが、覆刻本にもないから、この大徳信州路刊本は、かなりの残巻を傅氏が得てこれを旧海源閣本に合わせたものかと思われる。

この本のなかに、嘉靖修葉が二巻にわたって三葉ある。巻七の一葉は補刊年記はないがたしかに嘉靖の字様であり、この巻は大徳刊本が大半で、覆刻本の補刻一葉とともに補われたもののようである。巻四三の二葉は嘉靖二年修であるが、この巻は覆刻本の補刻葉が主体のところで、逆に大徳刊の原刻一葉とこの二葉とが配補されている。すでに配補といったが、この状態からこれら嘉靖修葉は本来これらの巻を構成したとは考えられず、傅氏が他から取って欠葉に補ったものと思われる。

いままでも触れてきたように、この一〇〇巻のうちには大徳本を明初に覆刻した本がかなり含まれている。その一五巻は全葉が覆刻本であり、五巻にはごく数葉の大徳本が補配されている。これらは覆刻本でもほとんどが粗黒口の補刻葉ばかりの本であり、その原刻葉はただ六巻にわずか一〜四葉づつ残るにすぎない。蔵印は傅氏のものが二巻にみえるだけで、他にはない。したがって、楊氏印のある目録はやはり覆刻本であるが、原刻が過半を占める点でも異り、この二一巻も傅氏が大徳本とともに配補に用いた本であろう。

そして、巻二七は、やはり印記がなくて傅氏による配補本であろうが、第一・二葉が覆刻本の原刻、三〜一三葉がその補刻、一四〜二八葉が大徳本の原刻であって、一巻のうちにさえたがいに取合された典型的な例といえる。

以上を綜合して、当初の楊氏海源閣本がよくわからないが、目録および巻一を除いては残巻どころか残葉がどれだけ存したのか疑問であって、傅氏が別の大徳本、その覆刻本の補刻本を合せて主体とし、それらの欠葉をまたあちこちから補ったものと考えるのである。

明初覆元大徳信州路儒学刊本

覆刻本は、前稿二一三頁下段の存六九巻二六冊を再び、二一七頁上段の存九一巻三〇冊を初めて調査してきた。

前者についてはとくに追加することもないが、二一四頁上段第三行の「C第七・八（巻二〇〜二七）冊」は「八・九」の誤記であった。

存九一巻（欠巻二二〜二四・二九・三〇・三四・六〇・七九・八〇）　三〇冊

〔明初〕覆元大徳信州路儒学刊本　（北平）

改装後補藍色表紙（二八・五×一九・三センチ）、包背装、襯紙を插む。北史目録は首四葉欠。巻一首葉は左右双辺（二二・一×一五・七センチ）、首題・行格等は大徳本と変らない。原刻本で補刻はないが、欠葉が非常に多く、とくに巻三二はわずか存一葉で、この前後の巻は数葉ないし一〇数葉が続けて欠けている。補写が三葉、大徳本による補配が巻七五に一、七六に九葉、七六の大半という不全本である。

「晋府／書画／之印」「敬徳／堂図／書印」印が第二冊の首尾だけにある。